

湘南藤沢学会 研究助成基金

成果報告書

人工知能学会全国大会における「身体知の表現と獲得」セッションでの研究発表

慶應義塾大学 環境情報学部 4年 鈴木聡子

1、活動日程・会場

日程：2016年6月6日～7日

会場：福岡県北九州市小倉 北九州国際会議場 他

2、活動目的

2016年6月6日から9日に開催される第30回人工知能学会全国大会において、研究発表を行うことが本活動の目的である。同年3月に執筆した「子どもの学びにおいて二人称的他者は何ができるのか」と題する論文について発表し、参加者との議論を行ったりフィードバックを得たりする機会を持つ。学内での発表では得ることが難しい、新鮮な視点を持ったフィードバックを得て、今後の研究活動をさらに深める。

3、活動内容および成果

第30回人工知能学会全国大会は、発表件数約700件、参加者約1600人という規模で開催された。その中で6月6日に行われたオーガナイズドセッション「身体知の表現と獲得」において論文発表を行った。

今回発表した「子どもの学びにおいて二人称的他者は何ができるのか」という論文では、「子どもたちにどのように育ってもらいたいか」「そのために先生が取れるアプローチは何か」という二つの問いに基づいて論を展開した。申請者自身が塾講師として小学生と関わっている経験を根底に置き、教育的理論や他の教育者へのインタビューを踏まえて上の二つの問いの答えを探求する論文となっている。

論旨の軸となっているのが、佐伯胖氏による「学びのドーナツ理論」(図1) [1]である。この理論では、学ぶということは学び手にとっての未知の世界である三人称的世界 (THEY世界) を知ることであり、それを知るためには必ず二人称的世界 (YOU世界) を通る、とされている。学びを導く存在である先生は、子どもにとっての二人称的他者 (YOU) となることが望ましい。

論文内では二人称的他者が導くべき子どもの姿は「人間偏差値の高い子」とであると結論付

け、その中には3つの側面があるとした。「規範に目を向ける側面」「周りに目を向ける側面」「自分に目を向ける側面」である。これら3つの側面を、バランスよく持つ子どもを育てることが良いと述べた。またそれぞれの側面を育てるために、二人称的他者は様々なスタンスを使い分けてアプローチを行っている。本発表では申請者自身の経験から抽出した5つのアプローチの中から、「背中を見せる」「気持ちを伝える」「透明になる」という3つのアプローチを発表した。

発表は大学教授をはじめとした数多くの教育者の方々に聴いていただき、その後の議論も活発なものとなった。「先生が一人ではなく多数の場合のアプローチの可能性を考えてみてはどうか」や「先生が二人称的他者でない方が望ましい場面もあるのではないか」という、申請者一人では考えの及ばなかった視点からのご意見を頂戴したことは、今後研究をさらに発展させるにあたって大きな成果となった。

また、ベテランの教育者の方々の前で発表するという経験を通じて、教育者としての未熟さや若さを痛感した。学部4年生という身で「教育」や「人間力」という大きなテーマを扱うことの難しさ感じたのである。だがそれと共に「大学生の教育者が人間力を育む塾で小学生を教える」という自らの立ち位置の稀少性に気づくことができた。今後はその立場から得られる知見の独自性を遺憾なく発揮し、他の教育研究者には見出せないオリジナルの教育論を構築することを目指したいと思う。

学会での発表を経験し、ベテランの教育者の方々の忌憚ないご意見を頂けたからこそ、今後の研究における新しい目標を持つことができた。これこそが最も大きな成果だと言える。

[1] 佐伯胖 (1995). 「学ぶ」ということの意味 子どもと教育. 岩波書店



(写真1:オーガナイズドセッション発表風景)

4、謝辞

本学会参加にあたり、暖かなご援助をくださった湘南藤沢学会ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。